

世界遺産提案

まず佐渡を知る運動を

県と佐渡市が二十九日、佐渡金銀山遺跡などの世界文化遺産登録を目指して、文化庁に提案書を提出した。

ユネスコの世界文化遺産に登録されるためには、いくつもの手順を踏まなければならない。県と佐渡市が今回提出した提案書は第一段階の手続きであり、国内の選考を経てユネスコの候補地暫定リストに載せてもらうことが目的だ。

佐渡金銀山を世界文化遺産に登録しようという運動は、一九九七年に郷土史家のグループによって始められた。合併前の島内市町村会がそれに呼応し、加えて県も支援に乗り出すなど足かけ十年にわたる取り組みがあった。

最初のハードルは来年一月に予定される国内選考だ。今年から地方自治体が候補地として手を挙げる公募方式が変わったため、国内にライバルは多い。佐渡市

はこれまでやや出遅れた感があっただけに、前途は楽観を許されない。

しかし、正式に名乗りを挙げたことで運動は新たな局面を迎える。登録に向けた機運も一段と盛り上がるはずだ。県と佐渡市が緊密に連携するのはもちろんのこと、地元住民の理解や協力を得ながら一大キャンペーンを展開したい。

提案書には「金と銀の島、佐渡―鉱山とその文化―」の題名が付けられた。相川金銀山を筆頭とする「金銀鉱山遺跡群」、大立堅坑などを含む「近代鉱業遺産」、相川の町並みや港町小木などの「鉱

山都市遺跡」を核と位置付ける。

島内に数多く現存する能舞台、寺社などの建造物、いまでも息づく能楽や鬼太鼓などに代表される文化を強調しているのも提案書の光る点だ。金銀山がもたらした独特の歴史や文化を包含した膨らみと深みのある構成といえよう。

金銀山の開発を通して佐渡に広く集積した遺産は、運動面で先行する国内の他の候補地に比べて、規模も内容も決してひけを取るものではない。関係者は大いに自信を持って取り組んでほしい。

国内選考は目前に迫っている。各候補地の宣伝合戦はこれからますます激しくなることだろう。そんな中にあっても地に足の着いた運動を忘れたくない。

大事なのは、地元の人から佐渡の歴史や文化をよく知ってもらうことだ。郷土に誇りを持ち、遺産を大事にする気持ちはそこから生まれる。登録には地元住民の協力が不可欠だけに、佐渡をもっと学ぶことから運動の輪を広げよう。